

日蓮大聖人御書全集

うえののあまごぜんごへんじ

上野尼御前御返事

りようぜんさいかい こと

（靈山再会の事）

新版
1920
〜
1921

うえののあまごぜんごへんじ　りようぜんさいかい　こと

上野尼御前御返事（靈山再会の事）

こうあん　ねん　がつ　にち　さい　うえののあま

弘安4年（'81）1月13日　60歳　上野尼

せいじん　一　筒　提　じゅう　むしもちひやく　あめ　一　桶　にしよう

聖人ひとつつひさげ十か・十字百・飴ひとつおけ二升か・

こうじ　一　籠　くしがきじつ　串　栗　た　そうら　お

柑子ひとこ・串柿十くし、ならびにくり給ひ候い了わんぬ。

はる　初　おんよろこ　はな　開　つき　満

春のはじめ、御喜び花のごとくひらけ、月のごとくみた

たも　由　承　お

せ給うべきよし、うけたまわり了わんぬ。

ここご　郎　殿　おんこと　思　出　そうら

そもそも、故五ろうどのの御事こそおもいいでられて候

散　はな　咲　枯　草　萌　こころう

え。ちりし花もさかんとす、かれしくさもねぐみぬ、故五郎

どの　帰　たま　むじよう　はな

殿もいかでかかえらせ給わざるべき。あわれ、無常の花と

草 様

ひとまる

はな

許

離

くさとのようならば、人丸にはあらずとも花のもともはな

駒

くさ

許

去

れじ、いはうるこまにあらずとも草のもとをばよもさらじ。

きようもん

こ

敵

説

そうろう

謂

経文には、子をばかたきととかれて候。それもゆわれ

そうろう

ふくろう

もう

鳥

はは

食

はけい

もう

獣

候か。梟と申すとりは母をくらう。破鏡と申すけだもの

ちち

害

安

禄

ざん

もう

ひと

ししめい

もう

こ

は父をがいます。あんろく山と申せし人は史思明と申す子に

殺

よしとも

もう

兵

ためよし

もう

父

ころされぬ。義朝と申せしつわものは為義と申すちちを

殺

こ

敵

もう

きようもん

そうろう

ころす。子はかたきと申す経文、ゆわれて候。

こ

たから

もう

きようもん

みようしようごんのう

いちご

のち

また、子は財と申す経文あり。妙莊嚴王は、一期の後、

むけんだいじよう

もう

じごく

お

たも

じようぞう

無間大城と申す地獄へ堕ちさせ給うべかりしが、浄蔵と

もう たいし 救 だいじごく く 免 たも

申せし太子にすくわれて、大地獄の苦をまぬかれさせ給う

しやらじゅおうぶつ もう ほとけ 成 たも しょうだいによ

のみならず、娑羅樹王仏と申す仏とならせ給う。青提女と

もう によにん けんどん 咎 がきどう お そうら

申せし女人は、慳貪のとがによつて餓鬼道に堕ちて候いし

もくれん もう こ 助 がきどう い そうら

が、目連と申す子にたすけられて、餓鬼道を出で候いぬ。

こ たから もう きようもん 違

されば、子を財と申す経文たがうことなし。

こころうどの 年 じゅうろくさい こころ 根 見 目 形 ひと 勝

故五郎殿は、とし十六歳。心ね、みめかたち、人にすぐ

そうら うえ おとこ 能 具 ばんにん 褒 そうら

れて候いし上、男のうそなわりて、万人にほめられ候

親 こころ したが みず 器 物

いしのみならず、おやの心に随うこと、水のうつわものに

随 影 み 家 柱

したが、かげの身にしたがうがごとし。いえにてははしら

頼

みち

杖

思

箱

財

こ

とたのみ、道にてはつえとおもいき。はこのたからもこの子

使

しよじゆう

われ死

担

のため、つかう所従もこれがため、「我しなば、になわれ

野辺

行

後

跡

思

置

てのぼへゆきなん。のちのあと、おもいおくことなし」と

深

思

先

立

ふかくおぼしめしたりしに、いやなくさきにたちぬれば、

夢

幻

醒

「いかにや、いかにや。ゆめかまぼろしか。さめなん、

思

醒

年

返

さめなん」とおもえどもさめずして、としもまたかえりぬ。

待

覚

行

合

所

いつとまつべしとおおぼえず。ゆきあうべきところだにも

もう

置

羽

てん

上

船

申しおきたらば、はねなくとも天へものぼりなん、ふねな

唐

土

渡

だいち

底

聞

くとももろこしへもわたりなん。大地のそこにありときか

ば、いかでか地ちをもほらざるべきとおぼしめすらん。思

易々易々会会たもたもそうろうそうろうしゃかぶつしゃかぶつおんつかおんつか
やすやすとあわせ給うべきこと候。釈迦仏を御使いと

して、りようぜん浄土へまいりあわせ給え。「もし法を聞くほうき

ことあらば、一りとして成仏せざることなけん」と申して、ひとじようぶつじようぶつもう

大地はささばはずるとも、日月は地に堕ち給うとも、しおはだいち差差外外にちがつにちがつちちおおたもたも潮潮

みちひぬ世はありとも、花はなつにならずとも、満干干よよはなはな夏夏生生

南無妙法蓮華経と申す女人の、おもう子にあわずというこなんみようほうれんげきようもうもうによにんによにん思思ここ会会

とはなしととかれて候ぞ。いそぎいそぎつとめさせ給え、説そうろうそうろう急急勤勤たまたま

つとめさせ給え。たまきようききようきんげんきようききようきんげん恐々謹言。

しょうがつじゅうさんにち

正月十三日

うえののあまごぜんごへんじ

上野尼御前御返事

にちれん

日蓮

かおう

花押